バリアフリー授業を考える
～小学生にもわかりやすいバリアフリーの授業とは～

Thinking about barrier-free classes
～What is barrier-free class that is easy for elementary school students to understand?～

大石佳奈，久保木彩名，小泉樹，橋口果琳
指導教員　眞保智子

法政大学 現代福祉学部・福祉コミュニティ学科 眞保ゼミ

キーワード：バリアフリー，ノーマライゼーション，質的調査，暮らしやすさ，多様性

１.はじめに

小学生を対象に共生社会に向けて重要な考え方である「バリアフリー」について伝える法政大学現代福祉学部眞保ゼミの活動は、コロナ災禍の最中である 2021（令和 3）年に始まった。2 月に大学近隣の八王子市立椚田小学校、緑が丘小学校、横山第一小学校のご協力を得て、バリアフリーに関するオンラインクイズを企画した。当時は家庭の通信環境が必ずしも整備されている状況ではなく、参加者は 3 名であったが、眞保ゼミ 6 期生の先輩たちは小学生の様子に大いに手ごたえを感じたと聞いている。

オンラインクイズイベントでご縁をいただき、横山第一小学校緒方礼子校長先生（当時）より、4 年生を対象に総合学習でのバリアフリー授業の提案をいただき、2021（令和 3）年 5 月 26 日に眞保ゼミ 8 期生が、翌年 2022（令和 4）年 9 月 12 日に眞保ゼミ 9 期生が授業を実施した。本発表では、2022（令和 4）年度に眞保ゼミ 9 期生が行ったバリアフリー授業の内容をご紹介するとともに、配布したワークシートをもとに授業の振り返りと今後の展望についてご報告する。

２．実践研究方法

（1）対象：八王子市立横山第一小学校
　　4 年 1 組　児童３０名

（2）授業タイトル：「バリアフリーについて考えよう」

（3）授業の目的：バリアフリーの中でも、生活の中にあるハード面のバリアフリーに焦点を当て、理解を促す。

（4）授業のめあて：バリアフリーとはなにか、どのようなものかを理解する

（5）：ワークシート

３．授業内容

（1）導入の工夫

自己紹介に際しては、授業を行う大学生に対して親近感を抱いてもらうことを目指し、それぞれが小学生時代に好んでいた給食のメニューを発表したり、大学で提供されている学食の写真を見せたりといった工夫をした。

（2）スライドにおける工夫

児童が興味を持って授業に参加できるように、かつ視覚的にも理解しやすいよう心がけた。 具体的には、ふりがなやイラストを使用し、また動画やクイズを用いた。

（3）内容

バリアの中でも、ハード面のバリアに焦点を当てた。具体例として、駅の構内表示や多機能トイレなどの写真を用い、バリアをなくす工夫が施されている箇所を丸で囲む形式のクイズを行った。

４．ワークシートを用いた授業の振り返り

（１）分析方法

自由記述形式の２つの問いから得た、児童３０名分の有効回答を用い、質的調査を行なった。

一つ目の問い（以下①とする）では、授業で出題したクイズから大切だと思ったことについて記述してもらった。児童の記述した言葉を元に、授業の的を射ていると判断できる言葉を抽出して表にまとめ、全体を見て取捨選択を行った。取捨選択した言葉を、さらに「重要キーワード」「バリアフリーの恩恵を受ける対象」の２つに分類し、言葉の出現数や傾向等から、小学生の理解度について考察した。

二つ目の問い（以下②とする）では、授業全体の感想や意見を記述してもらった。児童の記述した言葉を元に、まず切片化を行い、言葉について関係性を見るため、マインドマップを作成した。次にエクセルを用いて、回答を言葉ごとに分け、同じ言葉が使われた回数を把握した。ここで分けた言葉をまとめて、カテゴリー分けした。また、授業を理解する上でポイントになる言葉と注意したい言葉を取り上げた。最後に、理解度についてレベル分けした。

(2)分析結果

①「重要キーワード」（例：使いやすい、大切など）を、一つ以上記していた児童の人数は、３０人中２０人であり、全体の約６７％であった。一方で、「バリアフリーの恩恵を受ける対象」（例：障害者、高齢者など）を一つ以上記していた児童の人数は３０人中１１人であり、全体の約３７％であった。

②理解度をレベル分けした結果では、Ｌｖ１は全体の１７％、Ｌｖ２は３０％、Ｌｖ３は３３％、Ｌｖ４は２０％を占めた。

(3)考察

①全体の約７割が「〇〇しやすい」という言葉や、「大切」といった言葉を用いていた。このことから、バリアフリーの存在意義や、その役割を理解するという授業の目的が、概ね達成されたのではないかと考察した。一方で、全体のうち約４割が「障害者」「高齢者」などのような、対象者に関するキーワードを用いていた。このことから、バリアフリーが、特定の人の利便性をあげるためのものであるという認識を残してしまったのではないかと考察した。

②課題は２つ挙げられる。まず、バリアフリーの大きな内容は理解できてもバリアフリーの対象を狭めて理解した方もいたことだ。バリアフリーが特別な人の為と理解させたと考えられる。高齢者や負傷者を例にバリアフリーを説明したことがその要因として考えられ、バリアフリーの対象は高齢者や負傷者だけではないことを強調する必要があった。もう一つは、バリアフリーを理解しそれを行動に移そうとする意思を示した方が少なかったことだ。バリアをなくすために自分たちでもできることを伝える必要があった。

５.まとめ

バリアフリーが 「必要なもの」「生活しやすくするもの」という理解を得られたと結論づけた。「バリアフリーとは何かを理解する」という目標は、およそ達成されたといえる。一方で、「バリアフリーがどのようなものか理解する」という目標は、「特定の人のもの」というような回答が散見されたため、未達成であるといえる。言葉選びや伝え方に課題があると考察した。